

二〇二三年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇二三年 二月一日実施

国語

一日午前四科

- 一、問題に答える時間は六十分です。
- 二、問題は、問題一 ～ 問題五 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

街を歩いていて、びつくり、いやな気がすることがある。

① すぐ前をすれすれに横切っていく人があるのである。混雑しているところならしかたがないが、広々としたところで、目の前を知らん顔して横切る。

あぶないじゃないか、失礼じゃないか、なんて乱暴な、などという怒りにも似た気持ちになる。

…… 中略 ……

人の行く手をぶつかるように横切るといふのは、戦後の悪習で、相手のことを考えない自分勝手のあらわれだと考えている。その身勝手は、こどものときのしつけの足りなさによると思われる。a、敬語をしつけていけば、まちがっても、こんなことはしなくなるはずである。相手のことをすこしでも考えたら、その行く手を、すれすれに通ることなどあり得ないだろう。

戦後の家庭は、核家族をよしとした。家族はみんな友だちのようであるのが新しいと錯覚した。三世代同居であれば、親は老親に敬語を使う。ご用聞きがやってくる。商人はていねいなことばを使うから、それに対してやはり、一種の敬語をつかう。② 両者のていねいさに差のあることを、こどもは覚えるともなく覚えた。

核家族は友だち夫婦と友だちこどもだけだから、ていねいなことばを使う場面がすくない。もちろん、敬語などというものは知るべくもない。

学校も、デモクラシーをはき違えた教育をする。教師と生徒は友だちのようであるのが望ましいとする進歩的？ 空気に支配される。敬語などの出る幕はない。

あるとき、昔の学生に、本をやった。礼状が来たのはいいが、はがき、である。

③ 「本受けとりました…」

とあるからおもしろくない。こんな人間を教えたのかと情なくなつて、*叱責のはがきを書いた。

「本を受けとる」

というのは、自分が人に貸した本が戻ってきたときのことばである。受け取るのは、当然くるものが来たときのことば、人から送られたものは「いただく」「頂戴する」でなくてはいけない。それに、人からもらった本を、ただ「本」と呼びすてにするのは、こどもでなければ恥ずかしい無知である。「ご本」などとしなくてはいけない。

礼状ははがきなどにすべきではない。封書が常識だ、というようなことは言ってもしかたがないと思つて書かなかつた。相手は、どう思つたのか、何とも言つてこなくて、④はなはだ、後味の悪い思いをした。

編集者はことばのエリートであるから、一般の人間よりことばの感覚がすぐれているだろうと思うが、そうでないこともある。

「原稿できましたら、とりに行きます」

と言つてくる。「原稿できましたら」というのは、自分の原稿のことになる。ひとの原稿なら、お原稿くらいにしたい。昔は「玉稿」だったが、いまどきそんな大げさなことばを使う人はいない。

「とりに行きます」はもつといただけない。「ます」とあるから、ていねいなつもりなのかもしれないが、これでは、昔流に言えば、借金とりが貸した金をとり立てるときくらいにしか使うことができなのである。それを知らなくても*エディターでございませう、と言つていられるのだから、⑤ありがたい世の中である。

…… 中略 ……

「私、尊敬できない人に敬語を使うことがいやなのです」

ある女子大学生が書いた文章に出会つておどろいたことがある。敬語は尊敬しているから用いるものだと考えているらしいのがおかしかつた。敬語を文字通りに受け取ればそうなるのかもしれない。敬語を知らない、つかわないのはしかたがないが、それを得意になつて言いふらすのは低級である。⑥無知の思い上がりである。この学生は、b、

「先生も、外国語には、敬語などない、と言つています」

といつて、先生にも恥をかかせた。いずれ国文科の教師であろうが、外国語など不案内にきまつている。ききかじりで、外国語には敬語がない、をふりまわしているのだろう。

文法は各国語においてそれぞれ個性的に違つている。万国共通文法（ユニバーサル・グラマー）の思想はあつても、具体

的に万国文法は存在しない。できないのである。

敬語は日本語文法では重要なカテゴリーであるが、英語などでは、待遇表現として同じような語法を認めているが、明らかに違いがある。⑦敬語そのものはないが、ていねい語法がないわけではない。

外国語に敬語がない、というのは、敬語をきらっている人の考えることである。日本の文物で外国と異なるところは、すべて日本に非があるように考えるのは、明治以降の排外思想のとぼつちりで、後進国の悲哀であると言つてよい。それを誇るのには恥ずべきことであるという反省はない。

外国語にあらうとなかろうと、日本語における敬語は日本文化の伝統に根ざしている。それによって、「*ことだまのさきはふ国」と誇ることができたのである。

敬語は日本の*ナシヨナリズムを代表するもので、和をとうとび、相手を尊敬、自我を抑制、鬭争を回避する点において、世界に誇つてしかるべきものである。

外国人で誤解するものがあれば、その*蒙をひらかなくてはならない。それを勘違いして恐縮するのは非愛国であると言つてよい。

大戦に破れて日本人はすこしどころでなくおかしくなっていたのであろう。

戦争に負けたのは、日本語のせいである、ということの本気で考える人があらわれた。

小説の神様、と戦前、あがめられた作家が、戦争に負けたのは、日本語を使つていたからである。フランス語を国語にしていれば戦争なんかにならずにすんだだろう。そんなことを大真面目にのべた。さすが、冷笑する向きもあったが、えらい文学者の言うことだから、そうかもしれないと受け取った人もすくなくなつたようである。

日本語がいけなかつたのだと考える人はそれほど多くなかつたかもしれないが、敬語は封建的でよろしくない、と考える人は、知識人中心に多かつた。戦争に負けたのは敬語のせいだとまでは考えないが、敬語などない方が進んだことばであるように思つたのであろう。敬語を目のかたきにした。

すでに国民の多くが敬語の正しい使い方がわからなくなつていたから、敬語廃止は歓迎された。ことばを人為的に消滅させることができるものか、そんなことを考えるゆとりはなかつた。

c、敬語は複雑で、こどものときによほどしつかりしつけられないと、うまく使いこなせない。学校で勉強するくらいでは身につかない。敬語の乏しい地方では、敬語の使えない人が多くて、社会へ出て苦労が多かった。

敬語を嫌った人たちは、日本が嫌いだったらしい。外国の思想にかぶれた人たちは、日本をきらい、日本語をさげすみ、外国のようになりたいと願ったようである。敬語など重視するのは保守反動だと考えた。

つまり、ナシヨナリズムがきらわれたのである。戦争が終わってしまっただから、ナシヨナリズムなどあつてはならない。そう考えた人たちは、日本語をナシヨナリズムの死にそこないのように思ったのであろう。日本語はダメなことばであると感ずる識者がゴロゴロいた。

敬語はその日本語のもっとも個性的な部分である。ナシヨナリズム排撃の鉾先が敬語に向けられてもおかしくない。実際にそうなつた。

さすがに国語の教師は大声をあげなかったが、言語学の専門家は当然のように敬語の整理を主張した。さすがに全廃とは言わないが、すくなくればすくないほどよい、と言つた。

学校が敬語を教えないのは当然である。家庭でも使われない。敬語ゼロの中で育つた人が大勢を占めるようになって、日本語は性格を変えることになつた。

人と人が接触すると、マサツを生ずる危険がある。へたをすると衝突して火花をちらすこともある。それをさけるためには、クツションになることばを交わして、危険をさける。あいさつはそのひとつ。はつきりした意味はなくても、対人マサツを除く潤滑油としての効果は小さくない。

敬語も同じように潤滑油の役を果たすことがある。あるがままでは相手を悪く刺激することも、敬語でくるめば、おだやかに受け容れられる。

敬語はまた衣服のようなものだと考えることもできる。こどもなら、裸で歩きまわつても愛嬌であるが、一人前の人間が何も着ないで人前に出るのは論外である。よその人に会うのなら、相手に相応しい服装をととのえる。昔の貴人は何枚もの着物を重ねて、相手への敬意をあらわした。

そんなことはどこの国だつて同じはずだが、実際には大きく異なる。ナシヨナリズムだからお国柄を反映して当然である。日本はもつとも、ていねいな装いをする国であるといつてよい。封建的だからではなく、人間関係が成熟して、

相手に失礼になることを避けようという気持ちがつよいためである。

別に誇るべきことでもないが、恥じなくてはならないことではない。そういうことを戦後の日本は考えなかった。国を愛する心をすて、母国語を大切にす精神を悪いと勘違いして、敬語はほぼ消滅するようになった。

ひとくちに敬語と言うが、敬語には三つの語群が含まれている。まず、尊敬語、相手を高めることばづかい。ついで、謙譲語。自分をひくめる言い方である。そして、ていねい語。これは、ものごとを、美しくする役目をもっていて、一般のことばにつけられる。酒といわないで、お酒というのはていねい語である。

尊敬語が敬語であるのはわかりやすいが、自分を低めることで相手を高めるのは日本語の敬語の大きな特色である。相手を立てる心が底流にある。

相手を立て、自己を低めていけば、争いになるべきところでも、コトなく通り抜けることができる。さらに言えば、相手の攻撃をかわず自衛の心理がはたらいていると見ることが出来る。敬語はひとのためならず、であると言つてよい。

いずれにしても、^⑧敬語は、平和、友好のために大きな貢献をしている。何なら、外国へ輸出して、世界平和のために役立たせてよいくらいである。それを日本人自身で否定するようなことがあつては、おかしい。

国語の勉強では、積極的に敬語の心を育まなくてはならない。自国のことばを大切にしない国は外国から尊敬されることがないのである。

(外山 ^{とやま} 滋比古 ^{しげひこ} 『国語は好きですか』 大修館書店)

〈注〉 *叱責……他人の失敗などを責めてしかること。

*エディター……編集者のこと。

*ことだまのさきはふ国……「ことだまのさきわう国」、言葉の靈力が幸福をもたらす国を表す。

*ナシヨナリズム……自国の文化、伝統等を重要であるとする考え。

*蒙をひらく……道理や知識が身につけていない人を教え導くこと。

問一 文中の空欄 a に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次のアから選び、記号で答えなさい。

ア まるで イ たしかに ウ さらに エ ところで オ たとえば

問二 — 線① 「すぐ前をすれすれに横切っていく」とありますが、筆者はこの行動をどのように捉えていますか。本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問三 — 線② 「両者のていねいさに差のあること」とありますが、「両者」とは何ですか。それぞれ答えなさい。

問四 — 線③ 「『本受けとりました：』とあるからおもしろくない」とありますが、筆者が「おもしろくない」と感じるのはなぜですか。説明しなさい。

問五 — 線④ 「はなはだ、後味の悪い思いをした」とありますが、それはなぜですか。説明として最も適当なものを次のアから選び、記号で答えなさい。

ア 今後は恥をかかずにすむように適切な敬語の使い方を教えてやったのに、相手からは何の反応も無く、余計な口出しをしたかのようになってしまうたから。

イ この先正しく使えるようにと親切心から敬語の使い方を教えてやったのに、相手からは何の反応も無く、敬語がきちんと身に付いたかどうか知ることができなかったから。

ウ 失礼な礼状をはがきで送りつけてきたことに対して叱責したつもりだったのに、相手からは何の反応も無く、反省したかどうか知ることができなかったから。

エ 適切な敬語の使い方をわざわざ教えてやったのだから当然感謝の気持ちを表すべきなのに、相手からは何の反応も無く、自分のしたことが無駄であるかのようになってしまったから。

オ あえて書かないまでも、本来礼状ははがきで出すものではないとほのめかしたつもりだったのに、相手からは何の反応も無く、こちらの意思が伝わったかどうか分からなかったから。

問六 — 線⑤ 「ありがたい世の中である」とありますが、これは筆者の皮肉を含んだ表現であると考えられます。どのようなことを皮肉として「ありがたい」と言っているのですか。筆者の考えを説明しなさい。

問七 — 線⑥ 「無知の思い上がり」とありますが、この女子大学生のどのようなところが「無知」のですか。答えなさい。

問八——線⑦「敬語そのものはないが、ていねい語法がないわけではない」とありますが、この説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 外国語にも日本語のように、対立を避けるために相手を敬い自己主張を控える表現が存在する。

イ 外国語には日本語のような「敬語」は無いが、年齢や立場などの相手との違いを尊重した表現はある。

ウ 外国語には「もらう」を「いただく」というように別の語に置き換えて敬意を表す表現は存在しない。

エ 外国語にもものごとを美しく表現するためのていねいな語法はあるが、日本の敬語とは明らかに異なっている。

オ 外国語には敬語が存在せず、相手への敬意を言葉で表現することができないので、態度によって表現する。

問九——線⑧「敬語は、平和、友好のために大きな貢献をしている」とありますが、筆者は、敬語を用いることでどうして「平和、友好のために大きな貢献を」することができると考えているのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 相手を立て、自分を低めることで相手と争う心が抑えられ、自分より他者の利益を優先するようになるから。

イ 自らが置かれた状況を観察することで、相手の攻撃を避け、言動に応じた適切な言葉を用いるようになるから。

ウ 和を大切にして自分を抑え、相手を思いやる心を持つので、相手との争いや摩擦を避けるようになるから。

エ 相手が理不尽な態度をとつても、表面的にはあくまで相手を敬い、おだやかな姿勢を保ち続けるようになるから。

オ 話し合いの場で、相手の主張が分かるまで、決して自分の考えを述べないよう心がけるようになるから。

問題二 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

午後四時。外は、まだずいぶん明るくて、グラウンドからは野球部の掛け声が、中庭からはトランペットの音色が響いている。作業を開始してまだ十分しか経っていないこともあって、その時教室にはまだ、朱里も含めた応援旗係全員が顔をそろえていた。

そんな時、それは起こった。

「あ」

「a」と目の前で鮮やかな赤色の絵の具がしぶきのように散ったのと、松村さんが短い悲鳴を上げたのは、どっちが先だったんだろう。

——嘘。

気づいた時には、背景の空の上に、赤い絵の具が点々と散っていた。拭きとる間もなく、赤い絵の具はすうっと吸いこまれるようにシミになっていく。目の前には、赤く染まった筆をパレットに置いて、^①青ざめた顔をした松村さんの姿があった。

「ごめん！ ごめんなさい……」

一瞬、しん、と静まり返った教室の中で、だれよりも先に声を上げたのは、松村さん本人だった。今にも泣きだしそうな顔で、「どうしようどうしよう」とうろたえている。

実際、これはまずいかも、というのは、私自身も思ってしまったことだった。

上から塗り直したって、背景の色が薄いぶん、どうしても派手な赤色のほうが浮き出してしまう。ごまかそうとしても、かえって悪目立ちしてしまいそうだ。だけど今は、涙目になっている松村さんを責める気にはなれなかった。

大丈夫だよ、なんとかなるよ——。

そうフォローの言葉を口にしようとした。けれど、その時だった。

「えー、超目立つじゃん。どうすんの？ これ」

ロコツな物言いにぎよつと顔を上げると、さつきまで手持ちぶさたにしていた朱里が、すぐそばに立っていた。きれいに整った眉をひそめて、応援旗を見下ろしている。

「あ、でも、上から塗り直せば……」

おずおずと、百井くんが言いかける。

けれどそれを朱里は、「や、そこだけ塗り直しても、かえって目立つでしょ」とあっさり一蹴した。その一言に、松村さんはさらに耳を真っ赤にして、「ごめんなさい……」とうつぶしてしまふ。しおりが手を当てた松村さんの肩は、すでに、泣きだす寸前のように小さく震えている。

——なんで？ 朱里……。

思わず隣をふりあおぐと、朱里はもう他人事みたいにつまらなそうにそっぽを向いていた。

その瞬間、私の中で、何かが弾けた。

「朱里」

口を開くと、思ったよりも低い声が出て自分でも驚いた。

朱里が、おつくうそうに首をもたげて私を見る。その視線にひるみそうになったけれど、私は、構わずに口を開く。

「……なんで、そういう言い方するの。それに、ずっとサボってたじゃん、朱里。② こんな時だけ責めるのって、おかしいよ」

言った。言ってしまった。

水を打ったような静けさの中で、カツン、と時計の針が動く音がした。しおりの、そして百井くと松村さんの視線をひりひりと肌を感じる。怖い。怖くてたまらない。

「……何ソレ。なんであたしが、悪者みたいになつてんの？」

抑揚のない声で言つて、朱里がカバンをつかむ。そしてポニーテールを揺らして、私をまっすぐに見た。少し前まで「葉！」と笑いかけてくれていた、勝ち気な猫みたいな瞳。でも今そこにあるのは、以前のような親しみじやなかった。

「日向」と「日陰」の境界線。それを朱里がたつた今、私の前に、完全に引いたことが、はつきりと分かった。

「……もういい。帰る」

そう吐き捨てる、ふり向きもせず、朱里は足早に歩いて行ってしまった。その背中を視線だけで追いかけるながら、私は、そっと目をふせる。

③ 泣きたかった。

「ただ、泣かない、と思った。」

だって、私は今、朱里に本当の気持ちを言った。そのことに、後悔はなかったから。

ゆっくりと深呼吸してふり向くと、しおりと最初に目が合った。心配そうなのままなざしに、大丈夫だよ、というふうに、私はうなずいてみせる。

「佐古さん……ごめんなさい。私のせいで」

目を赤くした松村さんに、私はううん、と首をふった。それは、本当の気持ちだった。私と朱里が衝突したのは、絶対に、松村さんのせいじゃない。

「……だけど、どうしようか。これ」

と百井くんがつぶやいて、私たちは改めて、赤く散らばったシミを見下ろした。

淡い色が混じり合った幻想的な空の中に、点々と散った鮮やかな赤。たしかに、そこだけ見れば、違和感はある。だけど、なんて鮮やかなんだろう。

そう思った時、bと心にひらめくものがあった。そうだ、初めてしおりと出会った日、私たちの間を吹き抜けていった風と、ひらめく花びらと――。

「……花」

ぼつんとこぼした私のつぶやきに、三人が、いつせいに顔を上げる。

「花？」

首をかしげるしおりに、私は大きくうなずいた。

「そう。隠すんじゃないくて、デザインの一部にするのってどうかな。空に花びらが舞ってるようなイメージで全体に描きかして。そしたら、遠目からでも華やかに見えるし……」

そこまで言った時、みんなの視線が私に集まっているのを感じて、はっとした。遅ればせながら恥ずかしくなって、cと頬がほてる。どうしよう。もしかして、おかしいことを言ってしまっただろうか――。

「いいと思う。すぐく」

え、とまばたきをする私の前で、しおりがまっすぐ私にほほえみかけて言った。

「やろうよ、それ」

…… 中略 ……

応援旗が完成したのは、完全下校のチャイムが鳴った、六時半のことだった。

「……終わったー!」

と、^④最初に声を上げたのがだれだったのかは分からない。そのぐらい、みんなの声が気持ちよくハモったから。ちょうどそこへ、「なんだ、お前らまだやってたのか」とやってきたザワ先は、完成した応援旗を一目見るなり、「おおつ、すっげえな!」と、年甲斐もなくはしゃいだ声を上げて、私たちを苦笑させた。

松村さんと百井くんとは、校門の前で別れた。

「今日はありがとう……本当に」

と、松村さんが言つて、「じゃあね」と、百井くんが手をふる。

遠ざかるふたつの背中を見送ってしまうと、その場には、私としおりだけが残された。

「……帰ろうか。私たちも」

どちらからともなく顔を見合わせて、私たちは歩き出した。

ひっそりとした夕暮れの道に、ぱたぱたと、私たちの足音だけがリズムを刻む。そういえば、こうしてふたりで帰るのは、いつぶりだろう。そんなことを考えていたら、ふいに横顔に視線を感じた。目を上げると、しおりがためらうように、おずおずと口を開いた。

「あの……宮永さんのこと、ごめん。私のせいだよね」

朱里の名前を耳にして、心が、ちくりと痛んだ。

平気——では、きつとないだろう。朱里は「日向」からはみ出した私を、きつと受け入れはしないだろう。そのことに、どうしようもないさみしさはある。でも、少し前まで感じていた怖さは、どこを探しても、もうなかった。

「大丈夫」

と、私はうなずいて、小さくほほえんだ。

「それに私、あの時初めて、朱里に本音を言えたから」

そう言いながら、⑤自分は今までは、どれだけ境界線を周りに引いてきたんだろう、と思った。しおりに対してだけじゃなく、朱里たちに対しても。いつだって皆に合わせて、顔色を読んで、笑っているだけ。一度だって、本気で向き合おうとはしてこなかった。

しおりは少しだまって、小さく「そっか」とつぶやいた。

うん、とうなずきながら、私はぎゅうつと指先を握り込む。そうだ。私はしおりに、言わなくちゃいけないことがある。「しおり、ごめんね」

ごめんなさい、と私が言うと、しおりの足がびたりと止まった。

なんのこと？ と、しおりは、聞かなかった。ただうつむいて、靴の先っぽをじつと見つめている。その姿は薄闇にぼやけ、表情までは見えなかった。

どのくらい経ったころだろう。

やがて、しおりがぼつんと口を開いた。

「いいの。⑥私も、同じだったから」

「……同じ？」

意外な一言に、私は思わず目を見張る。しおりは横顔だけで、小さく笑った。

「中学生になってから、葉子、急にきれいになったでしょ。大人っぽくて、おしゃれで。周りの友達もみんなかわいくて明るくて、私とは、全然ちがったから」

「……………」

「本当は、いつも話しかけたいと思ってた。なのにできなかった。私なんか話しかけられたら、迷惑なんじゃないかって。

無視されたらどうしようって。考えれば考えるほど、葉子が遠い人になってくみたいで、目を合わすのも怖くなっちゃって」

だから——と、しおりはひとりごとみたいにつぶやいて、私に向き直る。

「だから、私も、ごめん」

しおりの声が震えてる。そのことに気づいたとたん、吐息がにじんだ。まばたきをすると、こらえていた涙が、春の雨みたいになっぺたを滑り落ちた。

「……なんで、葉子泣いてるの」

「しおりこそ。目、真っ赤」

鼻をぐすぐすさせながらそう言って、どちらからともなく、笑みをこぼす。

顔を上げると、^⑦青と朱が溶け合って、やわらかなグラデーションを描いた空が目に入った。頭上にはレモンみたいな形の月が透けている。それを見た時、厚ぼったくはれたまぶたからすうっと熱が引いていくような気がした。心に、涼やかな風が吹く。

描きたいな、と、ふいに思った。

今の気持ちで、私は、この景色を描いてみたい。ヘタクソだって、しおりに及ばなくたっていいから。ただ、描きたい。

暮れていく通学路を、並んで帰った。

私たちは一年以上の空白をうめるみたいに、たくさんしゃべった。

空気に、かすかに夏の始まりのにおいがした気がした。アスファルトの上にふたり分の影法師が落ちて、ひっそりと寄りそっている。

…… 中略 ……

あれから——私は朱里たちのグループを抜け、しおりと過ごすことが多くなっていた。

抜ける、と明確に伝えたわけじゃない。だけど朱里はあからさまに私を避けるようになっていたし、しおりと急にしゃべりようになつた私を見て、美美とりっちゃんも、何かを察したらしかった。ふたりとは、おはようやバイバイは毎日言い合おうし、短い立ち話ぐらいは今もする。だけど前みたいに、四人で集まることはなくなつた。

「今日、暑いねー」

「ね、夏みたい。まだ五月なのに」

他愛ない言葉をしおりと交わしながら、階段に足をかける。と、その時ふと、上のほうからいくつかのぼらけた足音が近づいてきた。にぎやかな女の子たちの笑い声も聞こえてくる。その声のひとつに、覚えがあった。この声は――。

怖くない、はずがない。

でも逃げたくない。そう思った。

踊り場に差ししかかった時、華やかな女の子たちとすれちがった。バスケット部の子たちらしい、その集団の真ん中に、朱里はいた。こちらに気づくと、朱里はぴくりと目をこわばらせ、怒ったように顔をそむける。

けれど私は、ためらうことなく、その横顔に呼びかけていた。

「朱里」

言葉は、簡単に口をついて出た。

すれちがう一瞬、朱里の口元が、かすかに動いた――ような気がした。けれど結局、声が返ってくることはなく、朱里は無言で、私のわきをすり抜けていく。

「――またね」

遠ざかっていく後ろ姿に、たった一言投げかけた。当然のように返事はなかったけれど、想像していた怖さも悲しさも、不思議なくらい感じなかった。心配そうにこちらを見つめるしおりを、「行こっか」とうながして、私はまた、階段をのぼっていく。

美術室につづく廊下を歩きながら、窓ごしに、外を眺めてみた。

思いがけず中庭に松村さんの姿を見つけて、目をみはる。松村さんは金ぴかのホルンを胸に抱いて、数人の部員たちと笑い合っていた。それは放課後の教室で、私たちに見せたほんのりとしたひかえめな笑顔じゃなく、遠慮のない、あけっぴろげな笑顔だった。あんなふうに笑うんだ、と驚いて、ああそうか、と私はふいに気づいてしまう。

そうだ、私だけじゃない。

朱里だってしおりだってだれだって、境界線を持っている。だけどそれは、たぶんその人だけのもので、他のだれかじゃ

壊せない。越えられるのは自分で作った、自分の中の境界線だけなんだ、って。

それはとてもさみしくて、けれど、とても清々しい発見だった。

踏み出す足が軽い。心まで軽くなっていく。まるで、長い間こびりついていた砂がぼろぼろとこぼれ落ちてくみたいた。

「……あのさ、しおり」

呼びかけると、しおりは、うん？ と首をかしげた。その顔には、いつかのやわらかなほほえみが浮かんでる。初めて会った時の、つぼみがほどけるような、やさしい笑顔。

「描かせてくれる？ また、しおりのことも」

私が言うと、しおりは「えっ」とまばたきをして、みるみるうちに赤くなった。その変化がおもしろくて、私は思わず、あはっと声を立てて笑ってしまう。

「すごい、しおり。ゆでダコみたい」

「だって……」

廊下に、私たちの笑い声が明るく響く。美術室に行ったら、私たちはさっそく肩を並べて、キャンバスに向かうだろう。きつと、明日も明後日も。

⑧ それが境界線を越えて見つけた、十四歳の私の着地点だ。

やがて、私たちは美術室にたどり着いた。

ドアに手を伸ばしかけた時、ふと足を止めて、つかのま、後ろをふり返る。窓からふわりと風が吹いて、青葉を揺らす音がさわさわと響く。

そこにはもう、日向も日陰も見当たらなかった。

(水野 瑠見『十四歳日和』所収「ボーダレスガール」 講談社)

問一 文中の空欄 a c に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア ぴん イ かつ ウ ぽつ エ すうつ オ ふわつ

問二 — 線①「青ざめた顔をした松村さんの姿があった」とありますが、松村さんが「青ざめた顔」になったのはなぜですか。説明しなさい。

問三 — 線②「こんな時だけ責めるのって、おかしいよ」とありますが、「私」はどうして「おかしい」と思ったのですか。説明しなさい。

問四 — 線③「泣きたかった。だけど、泣かない、と思った」とありますが、ここからは「私」の二つの異なった心情が見て取れます。それを説明した次の文の空欄 A・B に言葉を入れ、説明を完成させなさい。

A けれども、 B という思い。

問五 — 線④「最初に声を上げたのがだれだったのかは分からない」とありますが、声がそろって出たことに、四人のどのような気持ちは表れていますか。答えなさい。

問六 — 線⑤「自分はこれまで、どれだけの境界線を周りに引いてきたんだろう、と思った。しおりに対してだけじゃなく、朱里たちに対しても」とありますが、朱里に対して「境界線」を引いたことによって、「私」はどのような態度をとっていましたか。答えなさい。

問七 ——線⑥「私も、同じだったから」とありますが、しおりはどういうところが「同じだった」と考えているのですか。次のアくオから最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 「私」がしおりを無視しても謝らなかつたように、しおりも「私」を避けていたことに対して謝ろうとはしてこなかつたところ。

イ 「私」が話しかけようとしてこなかつたしおりに不満を感じていたように、しおりも華やかな子たちとばかり付き合っている「私」に不満を抱いていたところ。

ウ 「私」が自ら朱里との関係を壊してしまつたと感じていたように、しおりも自分が「私」と朱里との関係を壊してしまつたと責任を感じていたところ。

エ 「私」がしおりに対して距離をとって話しかけなかつたように、しおりも「私」に迷惑をかけたなり無視されたりするのを恐れて距離を置いていたところ。

オ 「私」がしおりに迷惑をかけているのではないかと思つていたように、しおりも自分が「私」に迷惑をかけてしまつたとを恐れていたところ。

問八 ——線⑦「青と朱が溶け合つて、やわらかなグラデーションを描いた空が目に入った。頭上にはレモンみたいな形の月が透けている」とありますが、この情景には「私」のどのような気持ちが重ねられていると考えられますか。次のアくオから最も適当と考えられるものを選び、記号で答えなさい。

ア これまで交わることのなかつたしおりとの間に新たな関係が生まれ、それが新鮮に感じられる気持ち。

イ 朱里たちと一緒にいる中で無理をしていた自分から解放されたことによる、晴れ晴れとした気持ち。

ウ 自分を取り巻く友人関係がこれからのようになっていくのかがはつきりせず、落ち着かない気持ち。

エ 今はまだ始まつたばかりのしおりとの関係が、これから形作られていくことへの期待を感じる気持ち。

オ しおりとの間に抱えていた友人関係のわだかまりが消え、おだやかで爽やかなすつきりとした気持ち。

問九 ——線⑧「それが境界線を越えて見つけた、十四歳の私の着地点だ」とありますが、「私」は「境界線」についてどのようなことに気づいたのですか。答えなさい。

問題三

次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 彼女^かは、約束の時間に遅^おれたワケ^けを話した。
- ② 体調を崩^くしてセイヨウ^うすることになった。
- ③ あの先生のソ^ンダイ^{ダイ}な態度には、怒^いりを覚^かえる。
- ④ 検定試験を受けたら、思^いいのほかヤサ^しかった。
- ⑤ SNS上^{じょう}でうわさがカク^クサン^{した}。
- ⑥ 海外からの荷物が空輸^{くうゆ}で届いた。
- ⑦ 教室に眼鏡^{めがね}を忘れてきた。
- ⑧ 最近^{さい}は近^き所に八^は百^{ひゃく}屋^やがなくなってきた。
- ⑨ 用事^{ようじ}があつて、友^{とも}達^{たち}からの遊^{あそ}びの誘^{さそ}いを断^{ことわ}らなければならなかつた。
- ⑩ 音楽^{おんがく}会で、快^{はや}い演奏^{えんそう}に身^みをゆだねた。

問題四

次の①～⑩の——線部のカタカナを漢字に直したとき、その漢字の部首は何ですか。最も適当なものを、後のア～スから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 未成年を守るための法律がサダめられている。
- ② 私は将来、子どもの成長にカカわる仕事に就きたい。
- ③ ジ回のテストではなんとしても満点をとりたい。
- ④ 借りた漫画を早くカエさなければいけない。
- ⑤ 卒業式で彼とワカれたきり、連絡がとれない。
- ⑥ 毎朝、感染予防のために体温をハカる。
- ⑦ 大切にしていた宝物が箱のソコでつぶれていた。
- ⑧ 父は仕事のストレスでイが痛いようだ。
- ⑨ 姉の誕生日のおイワイに、ケーキを買おう。
- ⑩ 祖母の趣味は、アみ物をするのだ。

ア	にくづき	イ	いとへん	ウ	さんずい	エ	うかんむり	オ	りつとう
カ	きへん	キ	あくび	ク	まだれ	ケ	もんがまえ	コ	しめすへん
サ	がんだれ	シ	ころもへん	ス	しんによ				

問題五

次の文章中の空欄（①）～（⑩）に入れるのに適当な慣用表現を後のア～シから選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、文章に合わせて慣用表現の終わりの部分を直して考えて構いません。

ダンスパフォーマンスの大会に二人で参加しようと友人を誘ったら、鼻であしらわれた。彼女は、大勢の人の前で踊るなんて考えられないと言って、（①）。他に当てもなく、一人で参加することは考えられなかったので、私はがっかりして（②）。ところが、翌日になって彼女が（③）。「参加しても良いよ」と言ってきたので、私はびっくりして（④）。どういふ心境の変化かは分からないが、ダンスでは誰もが（⑤）。彼女と一緒にステージに上がることを考えると、今から（⑥）。実際、練習で見せる彼女のパフォーマンスには（⑦）。ものがある。私は（⑧）。彼女の動きを観察して、自分のパフォーマンスの向上に役立てようとした。彼女に見劣りするのではないようにと、これまでも（⑨）。のだ。本番では彼女の（⑩）。ことがないようになければ。不安はあるが、明日の本番が楽しみだ。

- | | | | | | | | |
|---|--------|---|-----------|---|--------|---|-------|
| ア | 腕を磨く | イ | 油を売る | ウ | 肩を落とす | エ | 一目置く |
| オ | 目を丸くする | カ | とりつく島も無い | キ | 足を引く張る | ク | 目をみはる |
| ケ | 藪から棒 | コ | 目を皿のようにする | サ | 胸が高鳴る | シ | 口火を切る |

(以下余白)